



十二指腸腫瘍の内視鏡治療とマネジメント

編著 小山 恒男, 矢作 直久

JA尾道総合病院病院長/広島大学名誉教授

田中 信治

十二指腸腫瘍内視鏡治療のバイブル

食道・胃のESDが一般化し、やや遅れて大腸ESDもほぼ一般化しており、現在は海外での展開が進みつつある。一方で、近年増加傾向にある十二指腸腫瘍の治療が発展しつつある。十二指腸は固有筋層が非常に薄いこと、Brunner腺が存在すること、スコープの操作性が不良であること、膵液や胆汁の存在によって後出血や穿孔のリスクが高く、また、緊急手術になると膵頭十二指腸切除など侵襲が大きくなる可能性も高く、その対応が大きな課題であった。しかし、近年の学会や研究会でのさまざまな報告や意見交換を聞いていると、内視鏡医学の進歩が確実にこれらの課題を克服しつつあるなと感じていた。

今回、小山恒男先生、矢作直久先生の編著書として、本邦屈指のエキスパートたちにより『十二指腸腫瘍の内視鏡治療とマネジメント』が医学書院から発刊された。今回実際に拝見して大変感銘を受けた。本書では、総論で十二指腸、十二指腸腫瘍の特性と起こり得る偶発症から、術前の病変の評価、状況の評価、それに応じたスコープや使用デバイス、治療手技の選択などについて詳述されており、胆膵内視鏡医や外科医との連携・協力体制などチーム医療の重要性も強調されている。さらに、円滑な治療のための鎮静や麻酔に関する解説も加えられている。十二指腸の内視鏡治療は、偶発症によって致命的病態になる可能性があるため、これらを正しく理解することは極めて重要である。

本書は美しい内視鏡画像をふんだんに駆使し、従来のEMRに加えて、cold polypectomy, under water-EMR, ESD, hybrid ESD, OTSCによる全層切除、さらにはD-LECSも加えて、その基本とコツが簡潔に詳述されており、トラクションをはじめとするさまざまな細かい工夫や各デバイスの特徴と使用法も手の内を隠すことなくしっかりと記述されている。また、偶発症予防法対策や穿孔部の縫縮術などもしっかりと盛り込まれている。そして、本書の最大の特徴として、34例ものさまざまなケーススタディの項が設けられており、深い実践的なトレーニングができるように構成されている。

本書はこの領域に携わる医師にとってまさにバイブルと言える教科書であり、十二指腸腫瘍の内視鏡治療に携わる医師は必読の書である。本書によって十二指腸腫瘍の内視鏡治療が安全かつ効率的に行われていくことが期待される。最後に、このような素晴らしいトレーニング書を企画し発刊してくださった小山先生、矢作先生に敬意を表したい。

●医学書院 刊 B5 頁292 2023年06月

定価:12,100円(本体11,000円+税10%)

ISBN 978-4-260-04337-3